

IR法案にもっと日本的知恵を盛り込め!

—日本型カジノの模索を—

金沢工業大学客員教授
(株)人間と科学の研究所 所長
飛岡 健

〈はじめに〉 国会でのIR法案の 審議の空虚さ

既に総論として議決されているIR法案の細則を決定する為の国会での審議が今国会の会期を約1ヶ月延長して行われる事になったが、6月下旬までの国会での審議の内容を開いていると、本当に粗末な内容の論議をしていると思えない。一つは、国会の場で新しい日本発のIR文化を形成して世界に発信するという意図が全く感じられない。せっかくの素晴らしい可能性を秘めた日本初のIRを展開していく上で、未だ二番手国として既に世界に存在する世界のIRの一部を取り入れるのみの議論に終始している。今までの海外からの文明、文化の取り込みの歴史の繰り返しの姿になってしまっている。日本の伝統文化の新しいIRへの取り込みと、VR、AI、IoT等々の最先端技術を駆使して、どのようにより新しく、より楽しく、より健全で、より経済的にも価値のあるIRを世界に先駆けて創造していかうかの議論ではなく、まるで鉄



火場でのヤクザの薄汚い賭博場を造るかの時代遅れで、創造力も想像力も無い議論をしているようで情けない。あるいは既存のカジノのマイナスポイントを取り上げ、その中でも依存症を極端に強調しているに過ぎないような議論が多過ぎる。関連する為政者は世界の現状をもっと知るべきであろう。あるいは更に批判を加えるならば単なる利権の調整会議や、ただ政党間の権力争いをIR法案を借りて、繰り広げているのみで、今日の日本の抱えている沢山の課題を、本法案を活用して、創造的に解決していくことの志は、全く伺えないのである。本来今こそ日本のあらゆる面で、日本の創造力を発揮せねばならないのである。

例えば、東京オリンピックに訪れる人々のより多くの楽しみのデザイン

ンや、国際会議都市（カンファレンスシティ）としての機能の充実や、その一環としてのレディースプログラムをどう対処するのか。あるいは小池都知事の語る金融都市としての展開を考えた時、世界の实体との比較から、もつと都市での楽しみをデザインする必要性や、約3000万人／年間に達せんとしているインバウンド観光客のナイトスポットが日本には足りないと言った不満をどう取り込むのか。その上に日本の伝統文化をIRにどう取り込むのか。あるいは先端技術をどう取り込みのか？そうした実質的な議論を国会の場で戦わせるのではなく、IRがあたかも問題の多いカジノだけを追求し、既存のカジノの悪しき側面のみを、上げ足取りの如くに論じて反対論を展開する野党、それに対し前述の如き、今日日本社会の置かれている状況を十分に吟味し、更に新しい世界に先駆けての日本型IRの創造案を提出して戦わせないで与党、いずれにも勉強不足であるし、未来を築いていく意志がみられず、情けない限りである。所詮二番煎じの国から、脱却出来ないのだろうか？

そこで本稿において、上記指摘を踏まえ、一つの試案を述べる事にする。

(1) 本当のカジノとは

私は世界中のカジノを将来の日本での普及の為に勉強するべく、世界中のかんりの数のカジノの地を実際に訪れている。アメリカのラスベガスや主要都市にあるホテル内のカジノを始め、チリ、パラグアイ等の南米のカジノ、モンテカルロ、バーデンバーデン等のヨーロッパのカジノ、あるいはトルコ等の中東のカジノ、フィリピンやネパールを始めとするアジアのカジノ、あるいは青天井とも言われるメルボルンを始めとするオーストラリア、ニュージーランドのカジノ、更にはルガーノ湖畔に出来たイタリア国境のカジノや、今日世界一と言われるマカオのカジノやシンガポールの素敵な建築物としてのカジノ等を巡り、実際にカジノでゲームをして遊ぶと共に、様々なイベントを楽しむ、その建築、内装、イベント、そして運営に関しても興味を持って研究してきた。真近では、ウラジオストクの空港の近くのカジノを訪れた。地域の名前は、ギャンブルゾーンであつ

た。余りにもストレートなネーミングなのでびつくりした。

そうした経験を踏まえれば、カジノにも様々な歴史的段階や、タイプの異なるカジノがあり、様々な運営と活用の方をしているのである。

一言でカジノを語る事は難しい。確かに、依存症等の問題を示しているケースも一部あるし、風紀上の問題があるケースもあるが、それは一部である。カジノは遥かに多くのメリッ

域、組織にもたらしているケースも少なくないのだ。そうした世界中のカジノの良いところを取り入れ、かつ日本文化の伝統を加味し、更に先端科学技術を駆使したカジノを造るべく検討する事こそが真に創造的で



ラスベガスのカジノ



バーデン・バーデンのカジノ



パリ モンレカルロのカジノ



マカオのカジノ



フィリピンのカジノ



ウラジオストクのカジノ

図1 世界のカジノの光景

あり、それこそが今日本社会に望まれている事ではなからうか？

元々、「小さな部屋」を意味したカジノの由来は、幾つかの説があるが、その一つはカジノは、「儲ける場」ではなく、ベルディの椿姫の中に一部出てくるカジノの場面のように、貴族達が「いかにお金を使えるかを競う場」であつたようだ。しかしフランス政府が、税金を徴収するのに良い対象として選び、課税するようになってから、そのカジノの性質がかなり大きく変化したとの歴史的説明もある。いずれにしても多くのカジノがその社会の「社交場」として位置づけられていたし、今も多くのカジノがその色彩を色濃く持っている。実はこの点は日本にとって極めて重要である。ただでさえ、大人の遊び場の少ない日本では、大人が堂々とキレイに遊べる空間を創り出す事が不可欠である。何故なら、個人金融資産残高(約1800兆円)の3分の2以上を65歳以上の人々が持っている状況があるからである。そのストックを正しくフロー化する方法論が、今日日本経済の発展の為に強く求められているからである。

(2) 本当のIRとは

さて今日統合型リゾート(IRR Integrated Resort)の必要性が日本でも呼ばれ、総論としてのIRR法案が衆院を通過し(2018年6月19日)、今日その細則についての議論がなされているが、本当のIRRとは具体的にどのようなに描像されるのであろうか？

この描像の作業こそが、本来一番重要である。戦略目標無くして、戦略、戦術はない。今までの議論を見ると、実はかなり曖昧な姿しか立法者達は描いていないのではなからうか？本来のリゾート、あるいはレクリエーションの定義は下の括弧の中のようなのである。そして図2の機能を全て持つのがIRRである。

しかし今日の日本におけるリゾートやレクリエーションの意味は、そうした定義と比べると曖昧である。未だ日本的に確立している訳ではなく、拡散している。現存リゾート地と関連する言葉を集めてみると、図3の如くなる。どちらかというと、図3の如くなる。どちらかというと、保養地を除いては、じつくり滞在するよりは、束の間訪れる所で

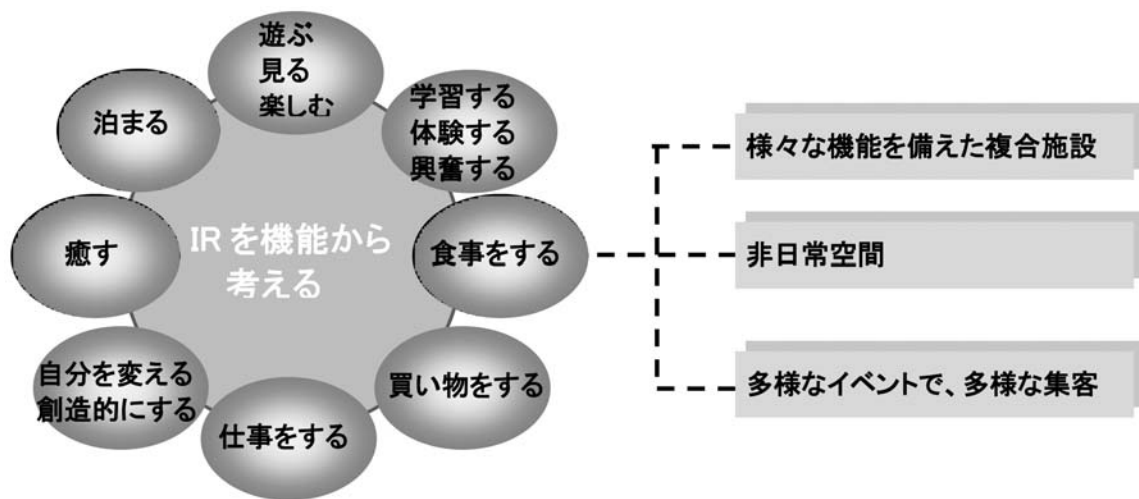


図2 IRに求められる機能

リゾート (Resort) とレクリエーション (Re-creation) の定義

本来、静かに神との対峙や、一人静かな思考出来る空間を求め、今の自分がこのままで良いのかを自問自答(反省)し、自分を新たにソートする。あるいはクリエイションし直す場、それがリゾートであり、レクリエーションの場である。



あり、自分をじっくりと見つめ直す場とはなっていない。むしろ観光地訪問の駆け足の旅というのが日本人の語るリゾートやレクリエーションであり、統合化されていない、もっと言えば統合化の目的が曖昧のままのリゾート地であり、レクリエーションの場なのである。これらの寄せ集め施設では、真のリゾートやレクリエーションの地とは言えず、世界の金持ちを集めるには不十分で

ある。私は(株)サンリオの顧問をしている時に、サンリオ文化研究所を設立し、初代の所長となり、「人間は十分なお金と時間を持ったら、どのようなライフスタイルを形成するか」という俗称「貴族研究」を行った。そこでは親しい仲間と美味しい食事や喫茶をし、楽しい会話をする事が主となり、その為に教養を磨き、新珍奇の話題を求めて世界を旅するようになることを、ロシアやヨーロッパの貴族、インドのマハラジャ、朝鮮の両班、中国の明の貴族、日本の平安、室町時代の貴族、江戸時代の旦那衆を生まれてから死ぬまでを、徹底的に調査する事によって明らかにした。これからの日本ではこれからそうした人々のニーズに答える事が非常に大きなウェイトで望まれるのである。まさに。一人当たりの滞在日数と消費金額の大きいVIPゲストが喜んで訪れる統合型リゾートの開発である。

それを達成させるのが日本が創り上げるIRの本当に求められる姿であろう。(続く)

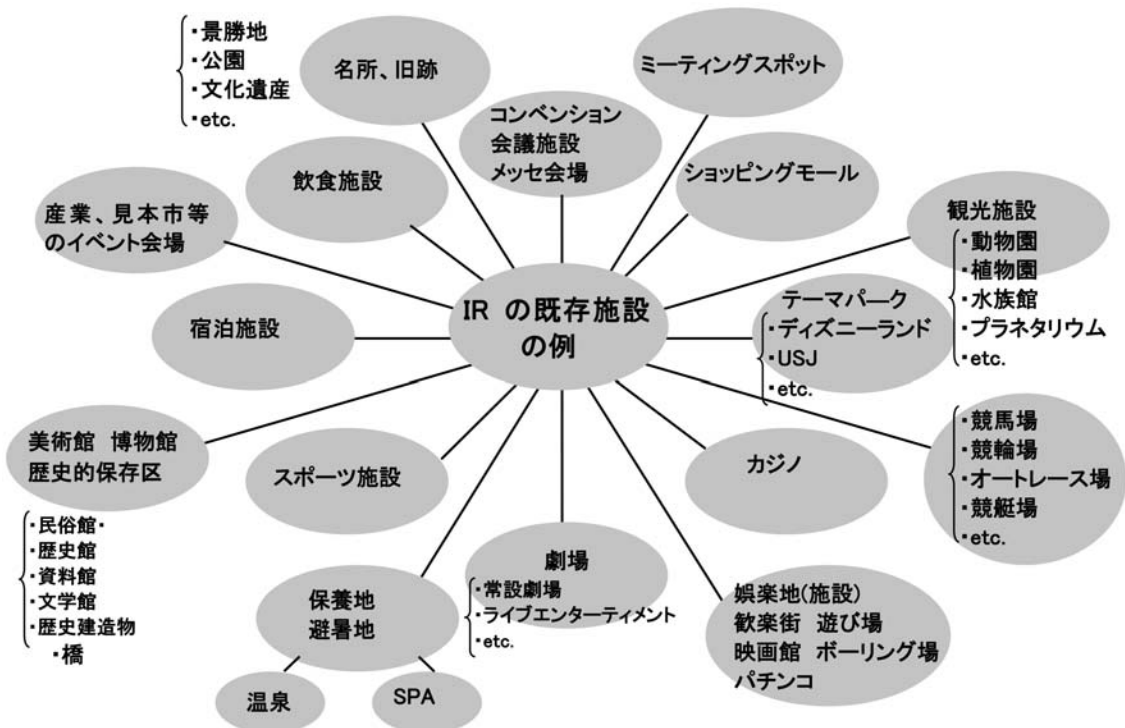


図3 IR施設の例